

〔翻訳：動物倫理の西洋文化1〕

カール・ブラウン
悪趣味？ それとも儀式

——スペインの闘牛への民俗学からのコメント——

Karl Braun, *Sadism or Brutal Ritual? On Bullfighting in Spain and the Possibility of Legitimization* (Original: *Sadismus? Rituell bedingte Grausamkeit? Zur Rolle der Gewalt in spanischen Stierkämpfen*. 1994)

河野 眞(訳)

Japanese translation by Shin Kono

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: takakons@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

No discussion is so hot as the one on bullfighting in Spain, because there seems to be no room for compromise between the opinions of both sides. The supporters find in it the beauty of national identity while the opposition criticizes it for merely being a corrupt practice and an example of commercialism. Karl Braun, Professor of the Institute of European Ethnology in Marburg, Germany, who taught at universities in Spain for a long time and has a wide experience and knowledge of Iberian cultures, attempts to place the “*corrida de toros*” in the traditional folk culture of the Spanish nation, taking notice of the stoic “art” of “matadors” confronting a mystically storming bull on one side and the behavior of “*aficionados*”, lovers of the sport, in the “arena” on other side. This essay “*Sadismus? Rituell bedingte Grausamkeit? Zur Rolle der Gewalt in spanischen Stierkämpfen*.” (originally 1994) is translated from German to Japanese by Shin Kono, Professor in Aichi University for the series with the theme “Animal Ethics in the Western Culture today”.

目次

1. 正反対の考え方
 2. 闘牛に反対する議論
 3. 闘牛愛好
 4. 〈コリーダ・デ・トロス（闘牛）〉の歴史から
 5. 民俗行事としての闘牛
 6. 豊饒をめぐる闘い
 7. 反対者を生むに足る残酷、そこに容赦はない
- (付) 解説 河野 眞

1. 正反対の考え方

ある人には〈わざ〉(art 藝術)であるものが、他の人には残酷としか見えないことがある。コリーダ (Corrida)、すなわち闘牛をめぐる賛否がそれである。両者は理解しあうことなく対立している。双方とも相手の議論を理解せず、それぞれ別々に催しものを企画しているように思えるほどである。無条件な受け入れに対するに断固たる拒否が屹立するのは、文化的な現象ではよく見受けられる。しかし通常は、自己の立場からではあれ、ともかくも相手の議論に耳を傾け、その上で根拠を挙げて批判し反駁するものであり、それによって双方とも相手について最小の認識を持つ。しかし、コリーダをめぐる確執ではそれすら見ることができない。

双方とも、コリーダに自分が感じとる強いエモーショナルな関わりから、自己のポジションの確かさを引きだしている。コリーダの反対派は、闘牛の現場へおもむいて、そこに血を流し断末魔の苦しみとともに息絶える牡牛だけを見出し、責めさいなむ行為が自己目的化しているとして嫌悪のかたまりになる。それに対して賛成派、この分野の言い方では〈アフィシオナードス (闘牛の通)〉(aficionados) は、牡牛に加えられる苦痛には意を介さず、トレーロ (闘牛士) と牡牛のあいだの互角の勝負について蘊蓄をかたむけて語り、(コリーダで起きはするが実際にはきわめて稀な) 奇蹟に期待をふくらませる。

同じ一つの催しものの認識におけるかかる懸隔には、無関心あるいは悪意ではすまない深い原因が存するであろう。またその原因は、文化的伝統に根差すにちがいない。動物愛護や動物の権利への姿勢、これらは現代の進展のなかに位置づけられる。もっとも、隔たりを把握したうえで概観するなら、中心にあるのは動物愛護者の立ち位置ではなく、現代的な思念に対立するアフィシオナードスの立ち位置で、そちらの方がより古い文化の源泉につちかわれている。

そこで基本的な問いが立つ。なにゆえ闘牛愛好者たちは、牡牛に加えられる暴力をち^{アフィシオナードス}らとも見ないのであろうか。

2. 闘牛に反対する議論

ADDA すなわち「動物権利保護協会」(Asociación para la defensa de los derechos el animal) は、1992年7月19日に『エル・パイース』紙にコリーダに反対する広告を掲載した。そのとき掲げられたスローガンがある。直立した牡牛、とは言え上半身だけだが、その牡牛が前脚の蹄を腰に当てて、こう言っている。〈ノー・コリーダ〉(No a la Corrida!)。牡牛の表情はたいそう優しく気持ちよさそうに見える。その横にはコリーダについて〈悲痛・野蛮・反時代的な見世物〉にして〈動物虐待〉である、と記されている。

この表現はスペインがここでも現代世界に接続したことをしめしてもいるが、そこから、動物愛護運動の三つの要点を取り出すことができる。

1. 動物は、人間との相互的な関係を欠いたまま中心に出てきて、自己主張をしている。
2. この自主性に富んだ動物は、人間の表情をもっている。動物の人間化の強いことは、人と動物の境が消えはじめたほどである。
3. 動物は、利益優先の勝手な暴力にさらされ、もしそれに声を出すことを得させるなら、自衛を図ることもできよう。

ここから、その動物の名において語り、権利のために闘う権利が生じる、ということになる。

かかる議論における微妙な点は、動物の人間化にある。衛生と清潔の観点の下、人間の生活空間は、一方で科学技術化を遂げ、他方で組織化にいたったが、その高度工業化のなかで、動物は一般の生活から急速に姿を消していった。リアルな生き物としての動物が視野から消滅するのと並行して、一般の議論のなかでは動物の評価がいちじりしく高まった。動物は〈自然の担い手〉として定型化され、それによってポジティブな感情に裏打ちされるようになった。アレンドレーアス・C・ビマーが「動物にいる場所はない」で要約したように (Bimmer 1991, S.201)、メディアに媒介された動物は〈まるで文明化した人間〉となっている。動物が文明的にふるまうことができるなら (多くの人々の心のなかではそういう現れ方をしてもいるが)、その死に方もまた文明的でなければならず、不必要に苦しまず、衆人の目にさらされてもいけない、ということになる。

かかる世界に、コリーダは合っていない。牡牛は公衆の前で無残に死んでゆき、そこにはリアルな斃死へのいかなるタブーも庇護の役割を果たさない。となると、たしかに問いが起きてくる面はあろう。なにゆえ牡牛はそんな死に方をしなければならないのか?——動物保護運動は、人と動物との付き合いの文化的諸条件をさぐるのではなく、動物を自立した存在とみなすところから、この問いに対しては、不名誉な、受け入れがたいモチーフを持ちだすことがある。営利追求である。しかも関係者には倫理のかけらもなく、観客の側もまた楽しければそれでよい、のだと言う。今日の性研究や心理分析の影響の下、くた

のしむ」という概念には、欲望のままになることがふくまれる。他者の痛みが遊戯の野にひきこまれるとなれば、かかる場合のジョーカー的な概念〈サディズム〉のカードを切るのに何の躊躇も要しまい。コリーダに反対する動物愛護家たちの議論をざっとまとめると、こうなるだろう。一般に人間がサディズムめいた欲望をもっているのであれば、牡牛をなぶり殺しにして金が儲かるはずがない、と。

3. 闘牛愛好

コリーダにおける牡牛の扱いをサディズムとよぶ非難に対して異論を呈したのは、スペインの闘牛反対者で個性あふれる文筆家ラファエロ・サンチェス・フェルロシオであった。1985年6月25日付けの『エル・パイース』紙上においてである。彼は、洗練されたサディズムという非難を断固としてしりぞけた。サディズムの定義には、犠牲者の苦しみをたのしむことがふくまれるが、闘牛では、いかに残酷であってもその要素はあり得ない、と言うのである。イギリスの人類学者ガリー・マーヴィンも、(彼の研究はスペイン全土にわたるが) アンダルシアでは、牡牛の苦しみに喜びを見出すようなことは決してない、と強調している (Marvin 1986, S.129)。

では闘牛愛好は何を栄養源にしてつちかわれるのであろうか。闘牛愛好の中心に位置する概念は〈わざ〉(art) で、ドイツ語に訳すなら〈型〉(Stil) あるいは〈型のたしかさ〉(Stilsicherheit) になるかもしれない。ともあれ、それが意味するのは、先に奇蹟と呼んだものである。奇蹟、それは闘牛が藝術となることである。闘牛士と牡牛という二つの異なった生き物が流れるような動きのなかでからみあい、(哲学的な言い方をすれば) ほんのわずかな瞬間ながら一つの存在となり、自然と文化が高揚した美のなかに昇華され溶けあうのである。闘牛愛好者がコリーダに待ち受けるのはそれ以上でもそれ以下でもない。

そうした瞬間を目にし得るには、愛好者には何がもとめられるだろう。足しげくコリーダに通い、お金を使い、牡牛の動きの能力や反応の習性について知識をたかめる。それは闘牛士についても同じで、正確な知識と可能性を把握するのである。一口に言えば、トレーロ誰それが牡牛を相手にどんなフィギュアを見せることができるかを知りつくすのである。そして闘牛場^{アリーナ}にあって、コリーダを構成している基準と戦術の決まりを、牡牛一頭ごとに識別し評価することができるまでになる。愛好者は牡牛に感嘆し、感情のこもった姿勢をとりこすすれ、攻撃性などは微塵もちあわせていない。コリーダを批判する議論はそうした愛好者には通用しないのである。闘牛の牛が育て上げられるのは、偏^{ひとえ}に、闘牛士^{トレーロ}に向かって突進し名誉のたたかいをし遂げる瞬間のためである。そこにおいて牡牛は、名誉の死すなわち素早い死をも勝ち得るであろう。闘牛愛好者が見せる非常に攻撃的

な反応の一つは、トレーロが自分の安全のためにとどめをさすのにたじろぐときで、トレーロには〈殺し屋め〉^{アエシノー}の聲が浴びせられる。

同じく愛好者たちがアグレッシヴになるのは、約束が破られたとき、すなわちトレーロが気後れして距離をとったり、また特に牡牛が頑健ではなく、みすぼらしく見えるときである。足を（ほのわずかだが）ひきずっている牡牛をコリーダの主催者がアリーナから引き揚げさせるのを拒んだりすれば、怒りの渦がわきあがる。

アフィシオナードスに代表されるプロの鑑識眼をもつ観衆は、決して血に飢えたサディズムに煽られているのではなく、サディストでもない。闘牛がはじまる前、アリーナを支配するのは儀式的な静寂である。それが、見事な闘いに対しては讃嘆に、牡牛あるいはトレーロが臆したときには怒りへと移ってゆく。アフィシオナードスの細かい特徴では、先にふれた祭儀の性格にちなんで、こんなことが言われる。彼らは、牡牛にたいして残酷な感情をまったくもっていない、と。それがまざまざとうかがえるのは、真のアフィシオナードはコリーダに食べ物を持参することであろう。サンドイッチあるいは大きなハムのかたまりなどで、周りの人たちにも分けながら、口にする。それにワインやコニャックも付く。食べない人たちも、通常晴れの御馳走のしめくりになる高価な葉巻煙草を一本か二本ふかすのである。

4. 〈コリーダ・デ・トロス（闘牛）〉の歴史から

コリーダ・デ・トロスはすこぶる複雑な儀式でもあるが、今日の形態に整ったのは、ようやく18世紀の最後の三分一の時期であった。比較のおそいことになるが、それに注目した研究文献は少ない。しかしどうして啓蒙主義時代にそのエポックの基本的趨勢に逆らうような儀式的な催しが形成され、完成にまでいたったのであろうか。これには、一つにはスペインの歴史の特殊性がかかわっている。また二つには、今日の複雑な新形態がいかなる先行形態から来ているのか、さらに、特殊スペイン的すなわち他のヨーロッパとは異なったメンタリティがどの程度までこめられているのか、という問題にかかわる。

コリーダはどうして成りたったのであろうか。エンリケ・ジル・カルヴォはその著作『^{トロス}牛の機能』(Gil Calvo, *Funcion de toros*. 1989, S.36) のなかで、牛争いの三類型を指定した。1. 封建制的・貴族的類型、2. 村落的・民衆的類型、3. 都市的・市民的類型。

類型1は、貴族の牛狩りや牛遊戯を指している。そこでは、牡牛は柵のなかへ追い込まれ、騎馬者と犬の挑発を受け、最後は殺された。あるいは、馬に乗った騎士が、^{トゥルニール}比武(武藝試合)の要領で長い槍で突き刺した。ちなみに類型3は類型1から直接発展した。この貴族の遊びでは、常に歩卒^{ペオネス}(Peones)が騎士を支援していた。徒歩の平民であるが、これが、18世紀を通じて、この遊藝が町の中央に場所を移していったときには先導役とな

り、したがって徒歩の勢子^{トレオ} (Toreo) の起源となった。この都市的・平民的な遊びは雑多で、特にルールをもたない民衆の楽しみであった。そしてここから徐々に、公開でおこなわれる今日のコリーダの型と約束がつくられた。

闘牛の歴史をあつかった書物を開くと、書き手が闘牛の保護派であれ反対派であれ、決まって語られるのは、闘牛が歴史時代より前に遡るという説明で、岩壁画や、クレータ島のミノタウロスの伝説¹⁾、あるいはミトラ教の信奉行事²⁾が証拠に挙げられる。反対派は、この歴史のなかの変わり種とその神話的・宗教的背景のゆえにコリーダについては、もはや時代はずれであるばかりか頹落形態にすぎないとの結論を引きだそうとする。片や、アフシオナードたちによる（あるいは彼らに向けた）書きものでは、この悠遠な伝統とそれがスペインではなお続いていることを誇っている。とは言え、なお継続しているとの主張を、発生史的に跡づけようとの姿勢は欠けている。古典古代^{アンティーク}と現代の牛の競技の関係を、現象学的な水準ではあれ、ともかくも試みたのは、宗教史家アンゲル・アルヴァレス・デ・ミランダの『牛をめぐる儀礼と遊び』(Angel Alvarez de Miranda, *Ritos y juegos des toro*, 1962) が最初であった。その研究は、アフシオナードたちの書き物では頻繁に引用されるが、そこで目を惹くのは、クレータ島の事例が好まれるのに対して、スペイン国内のエストレマドゥーラ地方³⁾(スペイン西部)の婚礼のさいの(すでに隠滅した)牛追い行事には関心が向かず、引用もされないことである。

それは不思議ではなく、類型2の村落的・民衆的な牛行事とのかかわりを知るのは難しいのである。コリーダは、その初期の18世紀の最後の三分の一の時期には、(そう見えないかもしれないが)自己を正当化することに苦しんだ。スペイン近代化の障害という非難と指弾にさらされたのである。スペインだけでなくヨーロッパ各国の啓蒙主義者がその種の攻撃をはじめ、さらにスペイン国王カルロス3世(Carlos III 在位1735-59)が1785年に、次いでカルロス4世(Carlos IV 在位1788-1808)が1805年に下した禁令の暗雲がたれこめるなか、コリーダをポジティブなイデオロギーづけによって作り上げるために、本来の土台を否定するほかなかったのである。土台とは多彩な民衆的な牛の催しものであった。殊に村々では、牛の行事はそれぞれの地元の祭りの中心であり、毎年村人が熱狂をみせていた。そのなかには、近代的な手直しがほどこされメリハリを際立たせたかたちで今日も祝われているものがある。これらのポピュラーな牛行事の多くは消滅するか、あるいはまったく目立たなくなった。なぜならスペインでは(他のヨーロッパ諸国ほどではなかったが)、民俗文化は、規矩良俗を重んじる風潮に屈したからである。実際、規則モデルが支配的であろうとするなら、民俗文化的な行事次第にうずまく^{カキス}混沌のような情動は不穏な事態を誘発しかねない代物であった。社会的訓育と経済的効率に立脚する規則原理に、そうした祭りは抵触し、野卑とコントロールのきかない爆発と醜悪によって、上品な文明的な身ごなしへの侮辱となった。端的に言えば、〈過ぎしいに^{カキス}しえの野蛮と暗黒〉

(*Stamford Mercury* 12.Nov.1814, — Malcolmson 1984, S.298より引用) の巣窟と解されたのである。ちなみにこの文言はイギリスのスタンフォードの牛の暴走祭りを名指したもので、ロバート・W・メルカムソンが、その論文「集中砲火を浴びた民俗文化」に引用されている。つまりイギリスにおいて闘牛の廃絶をめぐって1788年から1938年まで争われた長年月の係争に関する研究である。スペインの場合、そうした動きは、プロテスタント教会に立つイギリスほどには徹底していなかった。しかし1953年にフランコ政権の州知事とその命令を受けた警察がソリア (Soria) の〈^{サン}聖ホアンと聖母の祭り〉(Fiestas de San Juan o de la Madre de Dios)⁴⁾に対しておこなった介入は、150年前のイギリスの先例と驚くほど近似している (Delgado Ruiz 1986, p. 44-47)。

なお民衆的な牛の行事についての包括的な研究では、マニユエル・デルガード・ルイスの『神の死』(Manuel Delgado Ruiz, *De la muerte de un Dios*. 1986) の他、ギネス・セラ＝パガンの『パムプローナからグラザルマへ：共和国広場から闘牛場へ』(Gines Serran-Pagan, *Pamplona – Grazaalema. De la plaza publica a la plaza de toros*. 1981) がある。

5. 民俗行事としての闘牛

ソリアの聖ヨハネと聖母の祭りは、聖ヨハネの例祭日の後の木曜から次の月曜までの5日間にわたって開催される。初日の木曜には〈十二頭の牡牛の華麗な入場〉があり (B. Martin 1955, p. 180)、牡牛はそれぞれ12の教区からのものである。金曜には午前と午後の二回に分けてコリーダがおこなわれ、それぞれ6頭の牡牛が殺される。土曜には、各教区が自分たちの牛を解体する。見事な肉の山がかたわらに積み上げられると、この日の祭りの中心である〈いけにえのおこぼれ〉(despojos de los toros)、すなわち賑やかな^せ競りになる。翌日の〈鍋の日曜〉(Domingo de Calderas) はフライパンの日曜とも訳せるが、どの教区でも牛肉を煮た料理がこしらえられる。教区それぞれに日曜のミサが終わると、牛肉を山盛りにした鍋やフライパンが中央広場^{プラサ・マヨール}が集まってくる。それを教会の高位者たちが祝福すると、世俗者たちが味見をする。それがすむと、いよいよ12頭の牛肉をかこむ会食となる。それにはソリアの市民の全員が参加するほか、地元の貧民も同席する。祭りの最後は〈ダンスの月曜〉で、ミサと行列の後、ドウエロの草地にあつまってダンスの会になる。

民衆的な牛の行事のすべてが同様の複雑な構成をもつわけではないが、教会的な地元の祭りの性格をもつことはどれにも共通している。もっとも、ホアン・F・ミーラが指摘するように〈牛のいない^{フィエスタ}祭り〉(La fiesta *son* los toros) (Mira 1980, p. 109) をも考慮する必要もあるにはある。ともあれ、民衆的な牛の行事のヴァリエーションはまことに大きく、それは二種に大別することができる。

一つ目は、牛の〈追い込み〉(Encierros)で、牛を自由に走らせて、柵やその他の遮蔽物で囲った場所へ追い込むもので、数時間をかけ、多くは夜中におこなわれる。この種の追い込みは、コリア(アンダルシア州)⁵⁾のヨハネの日の牛行事がある。ここでは、牡牛ははじめ柵に囲われた中央広場で、木材を組んだ壇上に居並ぶ市民全員の前まで追い立てられる。次いで柵の戸が開け放たれると、牡牛は4時間か5時間のあいだ、柵で区切りがつけられた街を我がもの顔に走り回る。コリアの若者たちは、牡牛の前後を一緒になって走る。最後に牡牛は一突きを受けて殺される。

これ以外にもスペイン全土でおこなわれている追い込みの形態には、〈火の牛〉(toros de fuego)がある。牛の角に泥炭を塗るか、泥炭玉を刺し、それに火をつけて、走らせるのである。

二つ目は、〈繫いだ牛〉(toros ensogados)で、牡牛はロープにつながれている。ロープをつけたまま、牡牛は村のあちこちを追いたてられる。若者たちは牛にさわったり、尾をつかもうとしたりする。この種類に属するものには、牡牛を相手にしたさまざまな遊びがある。多いのは〈聖マルコの牡牛⁶⁾〉で、牛に酒を吞ませて酔わせた上で、何とミサに連れてくるのである(参照、Caro Baroja 1974)。またグアデラハラ州フエンテレシア(Fuentelecia / Gadelajara)では、聖アウグスティヌス⁷⁾の例祭日の8月28日に、綱につないだ牡牛を街で走らせた後、市長が厳かに刺し殺す。その後は有名な〈聖アウグスティヌスのスープ〉がこしらえられる。これは、肉を焙り肉にする間に骨をはじめ残りの全ての部分を大鍋で煮込むのである。そのスープが大勢にふるまわれ賑やかに食されることになるテーブルは、教会堂のなかに据えられ、最も貧しい人々もそれに与る。翌日は肉が分配される。そして会食が終わると、市庁舎のバルコニーから市長と地元の教区司祭が、あつまった大勢の住民に向けて牡牛の骨を投げる。人々は骨を争ってつかみとり、大事にかかえる。牡牛の骨には、聖遺物と同じく不可思議な霊力がこもっているとされるのである(参照、Navarrete 1955, p. 184)。

聖者例祭日のような公共の節目で催される牛の行事のほかに、私的な種類もみとめられる。今日ではすたれてしまったが、村落には婚礼の牡牛(toros nupciales)という風習がおこなわれていた。花婿とその友人が花嫁の家の前でカバ⁸⁾を振って牡牛を挑発し、また花婿は花嫁の手作りのバンデリーヤ(闘牛用の鉢)を使わねばならなかった。ちなみに昨今、コルメナル・ヴィエホの牛祭り⁹⁾などの逆流で、子牛あるいは若い牡牛を挑発するかたちで改めて継続するようになった面がある。

民衆的、かつ部分的には歴史的な性格をも帯びた牡牛の行事は、要約するなら、次の諸点を挙げることができる。もっとも、これまでの説明では、以下のすべてを取り上げてはいないが、改めて整理しておきたい。

1. ローカルな催しものであると共に、それぞれの地元の住民の全員が参加する。それゆ

え二部分から構成される。一方は人間であり、他方は（一頭あるいは数頭の）牡牛である。

2. 牛の行事の多くは夜中におこなわれる。あるいは少なくとも行事の一部は夜中である。
3. 締めくくりは、牡牛が犠牲になることが決まっている。しかしそこには計測不能なリスクもひそんでいる。牡牛と一緒に走る人間が死ぬこともある。牡牛は死なねばならない。しかし自己をまもり、人間を道連れにする権利をもっている（参照, Braun 1991, S.87-91）。
4. 犠牲の性格は、牡牛を祭儀的・儀式的に分けて食することにあらわれ、ソリアとフェンテラシアではそれが純粹に残っている。しかし牡牛肉の公共的な会食がなくても、この伝統は保持された。通常、どの家庭でも闘牛の牡牛の一部を買いとり、また祭儀の後でそれぞれの家に分けられる一塊の肉のもらい受けて家で食していた。貧民もまた肉の分与を受けた。経費の穴埋めは、角や尾や睾丸を競売に付すことによってまかなわれた（参照, Mira 1980, p. 122f.）。
5. 牡牛は一旦放たれるや、（通常、牡牛のことを口にするときには最大の尊崇が伴うにもかかわらず）敵意ある対立者としてあつかわれる。罵声を浴びせ、鉈を投げ、突き刺すのである。ここに着目して、民衆的な闘牛行事の残酷きわまる性格がみちびきだされることが多い。
6. 牡牛は走らなければならない。筆者は1984年にコリアでこんな経験をした。牡牛が中央広場から動こうとせず、街へむかって走り出す気配もみせなかったのである。その牡牛は、衆人の高まる怒りの的になり、残酷な扱いが度をたかめていった。筆者が〈どうしたんですか〉とたずねると、答えはこうだった。〈奴は走らなきゃいけないんだ〉(tiene que correr)。しかし、なにゆえ事が動かねばならないのだろう、どうして牡牛は走らねばならないのだろう。

6. 豊饒をめぐる闘い

ポルトガルとの国境に沿ったサモラ地方 (Provinz Zamora) には、〈螺旋の疾駆〉(Correr la rosca) あるいは〈螺旋の闘牛〉(Corrida de la rosca) と呼ばれる催しがある。リコバヨ (Ricobayo カスティーリャ・イ・レオン州)¹⁰⁾ については、フランシスコ・ロドリゲス・パスカルが〈パンの競走〉を書いている。10月7日は、その地の守護者である聖母〈ロザリオの女王〉(Nuestra Senora del Rosario) の例祭日で、同時にその地方一帯の収穫祭でもある。この日には、毎年ローテーションで聖母の二人の〈世話係〉(Mayordomas) と称される女性がそれぞれ3つのリング状の小麦粉パンを焼く。そのパンを聖母に捧げた

後、パンの競走がはじまる。未婚の若い女性たちがパンを小さい塊に分けると、既婚の女性たちがそれを奪おうとする。パンの取り合い、つかみ合いや殴り合いを交えながら村中を走りながらの遊びとして進行する。ややあって、未婚の若い女性たちは、自分たちの手元に残ったパンを、未婚の若い男たちに手渡す。そのパンをめぐる、今度は未婚の男たちと既婚の男たちとのあいだで取り合いが繰り返される。男女それぞれによるこのパンの競走は2時間から3時間つづく。今日では、救い出されたパンあるいは奪い取ったパンを食べてしまうが、昔は翌年まで保存していた。そのパンには結婚と豊作への魔術的な力がやどっていると考えられていたからである (Rodriguez Pascal 1988)。

守護聖人の日のパンの競走のほか、婚礼にもパンの競走が催される。このコリーダ (闘い) が年中行事としても、また個人々人にとっても、豊饒を願う性格を持つことは、あきらかである。

カルロ・ギンズブルグ (Carlo Ginzburg)¹¹⁾の出発点、それは、異端審問にさいして、魔女とともに豊饒をたたかい取るための良き意図であったと発言した〈ベナンダンティ〉の発見であった。そしてさらに著作『魔女集会』では、ヨーロッパの民俗文化の多くの現象を基本構図に帰せしめた。夜中の闘いにひそむのは、二つのグループによる豊饒の争奪である、と言う。女性神たちに付き添われた^{エクステン}恍惚の旅游、動物への変身、彼岸へ向かうシャーマン、仮面の裏の儀式的な戦い、動物に仮装した若者たち。この基本構図が、多彩な諸現象 (魔女集会、夜中の移動、死者の軍団、狼人間、仮面行列、美・醜のペルヒテ、動物供儀) の底に隠れている。

豊饒を争う二つのグループの裏に常に見え隠れする対立は、生きる者と死者との対立でもある。となると大テーマである。彼岸への旅游と彼岸からの帰還、それは来る年の豊饒を持ちきたる旅、ないしは確かにしてくれる旅。死者の世界にかかわるモチーフとして、ギンズブルグは、足をひきずることに着目した。すなわち、動物を殺し、その骨をあまさず集め、欠けた部分を木片でおぎなうまでするのであるが、それによって動物は、再び目を覚まして帰って来るとき、完全無欠となる (参照、Ginzburg 1990, p. 138)。

ギンズブルグは (ピレネー地方を除いて) イベリア半島には言及していない。しかしスペインの闘牛、パンの競走、牡牛を走らせる諸々の行事は、ギンズブルグが明るみに出した基本構図のなかにその理論的に帰すべき位置をもっている。

7. 反対者を生むに足る残酷、そこに容赦はない

牡牛を走らせる民衆的な行事は、二つのグループによる豊饒をめぐる〈戦い〉の図式に帰着せしめるに十分な構造的な特徴を見せる。村の住民が牡牛を相手どる。牡牛は犠牲として彼岸へ送られる。犠牲は共同体によって共に食され、それが儀式性を帯びていること

すら少なくない。そうした儀礼がなお存続しているところでは、食べるのに適さない部位も特殊な手続きであつかわれる（角や尾や睾丸などの残り物の競売、骨の貰い受け）。いけにえは単なる屠殺ではなく、戦いであり、斃たおされるのは牡牛であるが、人間が道連れにされて死ぬこともある。彼岸へ延びる戦いであるために、牡牛は動かねばならない。人の夜行もまたそれにひとしい。さらに死霊の群行、シャーマンの彼岸への浮遊、そしてスペインでは戦いは動き走ることとなる。

牡牛を前にした感情のたかぶりは、村にとって牡牛が彼岸へ向かい、豊饒を約束してくれることに起因する。コリーダが始まったとたん、人間が死ぬ可能性が前面に出て、これが牡牛を敵に変貌させる。危険な敵に対して、戦いのなかで容赦は要らず、残酷に暴力的に対処するしかない。牡牛への残酷な扱いは、それゆえ儀式の一部と解することができる。すなわち、戦いの一部として、また（村人がこぞって何らかの仕方での戦いに参加することからも）戦いの手続きの一部として解し得るが、それ自体が自己目的であると見ることはできない。

同じことを、今日のコリーダ・デ・トロスすなわちアリーナでの大規模な闘牛にあつま一般の観衆にも言えるだろうか。本稿の出発点は、多くのルールの下に進められるコリーダを前に観衆が牡牛への単なる暴力と残酷を見るのではないのに対して、外国からの観客がしばしばそこにしか注目しないことであった。筆者はまた、コリーダの起源への問いでは牡牛をめぐる民俗行事がほとんど顧慮されないことをも指摘した。そうした一般の行き方では、アリーナで繰り広げられるコリーダは、村の牡牛の民俗行事に渦巻く暴力のカオスとはつながりを持ち得ない。

コリーダのきびしいルールとそれを守ろうとする観衆の決然たる構え（参照、Fernandez 1987）は、通常スペイン人が物ごとにこだわらず即応的であるのと奇妙なコントラストを呈し、また無意識の自衛を示唆しているようでもある。それにしても、民俗行事に遡及し得るカオス的なあらゆる諸要素を締め出し、きっぱりと拒否しさえするとなれば、そこに果たして、この起源をめぐる（口にはしないものの）抑圧された認識が存するのだろうか。アフィシオナードの側から常に声高に〈わざ〉(art) すなわちクンスト（技藝）の性格が強調されるのは、^{クンスト}技藝なき村の振る舞いと何かのはずみで関係づけられることへの防波堤なのだろうか。コリーダをめぐる擁護の議論は、延命戦術の一つとして、コリーダを高次文化の諸現象に接続させることに躍起になっている。しかしそれ自体については理解する誰もかれもが、コリーダにあつまる観衆が村落的な民俗文化という汲めども尽きぬ源泉から常に新たに補充されることを知っている。

現代のコリーダは民俗文化としての牛の行事から生成した。同じくコリーダと呼ばれる名称の重なりが、すでにそれを示している。コリーダには、多彩な民俗文化の諸相と知識が融合して掛け替えのない総合となっている。そこでは、〈民俗文化のシンボリックな

コスモス
全一) (Delegado Ruiz 1986) が、形を変えて表出される。コリーダが二世紀にわたって今
みるような吸引力をスペインの民衆に及ぼし得たのは、この背景からあきらかになるだろ
う。

トレーロ
闘牛士と牡牛の勝負は、村を駆け回るコリーダの再現にほかならない。しかし、はるか
に密度が高く洗練された形態となっている。トレーロは自分の身体の周りで牡牛を回転さ
せる離れ業を披露する。彼は村では一人で村人全員を代表していた。アリーナでも、彼
は、観衆となった大衆の代わりでありその体現である。ほかならぬ観衆の立場に立ち、観
衆のために振る舞うことによって。

ここにおいて、コリーダが、村のローカルな行事から大都市の催しものに変貌したこと
があきらかになる。しかも現今のそれは、マスメディア時代にふさわしく、また国民的な
諸条件において呈示される。それはコリーダを経済の分野に引き入れた (Serran-Pagan
1981, p. 149f.)。しかし基底の文化的内実では同じものが保たれてきた。大勢の人々の〈体
感的知識〉(visceral knowledge) であるが、心理分析学の、よく知られた三角形理論¹²⁾の
解釈で把握できるよりも、さらに広く深い意味においてである (Schmid / Moerr / Eggert
1986, p. 101f., 143f.)。

あらゆる構造的な変化にもかかわらず、観衆のエネルギーが補給される内的な核は失わ
れなかった。豊饒のための戦いにおける敵対者。牡牛に加えられる暴力は必然的である
が、本来、視野の中心には入らない二次的な現象でもある。アフィシオナードにとってはは
るかに大切なのは、牡牛が動くことである。牡牛の民俗行事からアリーナでのコリーダへ
の変化は根本的なものであったが、依然、関心は牡牛が動き走ることにある。どう動く
か。闘牛士のさばき方に応じて、牛はいかに動くのか。——戦いへの直的な参加にあつて
は、重点は、勝負のなりゆきを美的な尺度で評する能力へとずれをきたした。アフィシオン
闘牛愛好が
息づくのは、この参加しつつ距離をとる能力にほかならない。

古きものが新たなものなかに生きつづけることに関して細かな点を二つ挙げておきた
い。それはアフィシオナードスにおける〈体感的知識〉を分かせてくれるだろう。観衆
のなかの通にあたるアフィシオナードスは、コリーダの最中に食べたり煙草をふかしたり
していることがめずらしくない。これは犠牲の牛をにぎやかな祭りの雰囲気の中で食す
ることが牛の行事の一環であったのを先取りしてはいないだろうか。もう一つは、足をひ
きずった牡牛が引き揚げられないときに沸きおこる怒りである。そうした牡牛は殊のほか
危険であるとされる。そこには、彼岸から帰り来た敵対者、すなわち勘がするどく、それ
ゆえトレーロを殺してしまいかねない復帰者の危険への古い知恵がはたらいているのでは
なからうか。

参考文献

- Angel ALVAREZ DE MIRADA, *Ritos y juegos del toro*. Madrid 1962.
- Andreas C. BIMMER, *Kein Platz für Tiere. Über die allmähliche Verdrängung aus der Öffentlichkeit des Menschen. Ein Essay*. In: Mensch und Tier. Kulturwissenschaftliche Aspekte einer Sozialbeziehung. Hessische Blätter für Volks- und Kulturforschung 27 (1991), S.195–201.
- Karl BRAUN, „Damit das Leben weitergehen kann“. *Zum historischen und kulturellen Hintergrund des spanischen Stierkampfes*. In: Mensch und Tier. Op.cit. S.83–100.
- Julio CARO BAROJA, *El toro de San Marco*. In: Ders., *Ritos y mitos equivocados*. Madrid 1974, p. 77–110.
- Manuel DELGADO RUIZ, *De la muerte de un Dios. La fiesta de los toros en el universo simbolico de la cultura popular*. Barcelona 1986.
- Tomas-Ramon FERNANDEZ, *Reglamentacion de las corridas de toros. Estudio historico y critico*. Madrid 1987.
- Enrique GIL CALVO, *Funcion de toros. Una interpretacion funcionalista de las corridas*. Madrid 1989.
- Carlo GINZBURG, *I benandanti : stregoneria e culti agrari tra cinquecento e seicento*. Einaudi 1972. 独訳 : *Die Benandanti. Feldkulte und Hexenwesen im 16. und 17. Jahrhundert*. Frankfurt / Main.; 邦訳 : カルロ・ギンズブルグ (著) 竹山博英 (訳) 『ベナンダンティ : 16–17世紀における悪魔崇拝と農耕儀礼』 せりか書房 1986.
- Carlo GINZBURG, *Storia notturna : una decifrazione del sabba*. Einaudi 1989. 独訳 : *Hexensabbat. Entzifferung einer nächtlichen Geschichte*. Berlin 1990.; 邦訳 : カルロ・ギンズブルグ (著) 竹山博英 (訳) 『闇の歴史 : サバトの解説』 せりか書房 1992.
- Robert W. MALCOLMSON, *Volkskultur im Kreuzfeuer. Der Kampf um die Abschaffung des Bullenrennens in Stamford im 18. und 19. Jahrhundert*. In: Richard van DÜLMEN / Norbert SCHINDLER, *Volkskultur. Zur Wiederentdeckung des vergessenen Alltags (16.–20. Jahrhundert)*. Frankfurt/Main 1984, S.282–298 (Anmerkungen S.427–429). h
- Garry MARVIN, *Honour, integrity and the problem of violence in the spanish bullfight*. In: David RICHES (Ed.), *The Anthropology of Violence*. Oxford 1986, p. 118–135.
- P. MARTIN BRUGAROLA, *Las fiestas de San Juan y de la Madre de Dios en Soria*. In: *Revista de Dialectologia y Tradiciones Populares (RDTP) XI (1955)*, p. 178–182.
- Joan F. MIRA, *El pueblo, el toro y “los que van por delante”*. In: Ders., *Vivir y hacer historia. Estudios desde la antropologia social*. Barcelona 1980, p. 105–128.
- Ernesto NAVARRETE, *La fiesta des San Augustin, patrono de Fuentelencia (Guadalajara)*. In: *RDTP, XI (1955)*, p. 182–184.
- Francisco RODRIGUEZ PACUAL, “*Correr la rosca*”. *Una costumbre ludica de Zamora y Tras-os-Montes*. In: *RDTP, XLIII (1988)*, p. 489–498.
- Rafael SANCHEZ FERLOSIO, *Coria, Coria!* In: *El Pais*. 25.6.1985, 13.
- Gunzelin SCHMID NOERR / Annelinde EGGERT, *Die Herausforderung der Corrida. Vom latenten Sinn eines profunden Rituals*. In: *Kultur-Analysen. Mit Beiträgen von Han Dieter KÖNIG / Alfred LORENZER et. Al.* Frankfurt / Main 1986, S.99–162.
- Gines SERRAN-PAGAN, *Pamplona – Grazaleme, De la plaza publica a la plaza de toros*. Barcelona 1981.

訳注

- 1) ミノタウロスの伝説：ギリシア神話の牛の怪物。クレータ島のミノス王の宮廷にいたとも、ミノス王と同一の存在とも言われる。アテネはクレータ島の先進文化も下属し、生贄としてミノタウロスに食われる乙女を送っていた。それを英雄テセウスが退治したとされる。クレータ島では牛が信奉されていたことが反映されているとみられる。
- 2) ミトラ教の信奉行事 (Mithraskult) : 古代ローマの帝政時代に帝国内に広まった宗教の一つで、キリスト教のライヴァルでもあった。

- 3) エストレマドゥーラ地方 (Extremadura) : マドリッドからは南西にあたる州で、ポルトガルとの国境にも接している。
- 4) ソリア (Soria) の〈聖ホアンと聖母の祭り〉 (Fiestas de San Juan o de la Madre de Dios) : 6月24日にカスティーリャ・イ・レオン州のソリア県の県都でもあるソリアでおこなわれる聖母と聖ヨハネの祭礼。この祭礼でも牛追いがおこなわれる。
- 5) コリア (Coria) : コリア・デル・リオ (Coria del Rio)、アンダルシア地方セビリア県の自治体。セビリアから15km。
- 6) 〈聖マルコの牡牛〉 (Markus-Stiere) : 聖者マルコの日 (4月25日) を節目として牛の聖別や牛追い行事が行なわれることを指す。
- 7) 聖アウグスティヌス (Aurelius Augustinus 354-430) : 初期キリスト教時代の教父で最大の神学者。ヒッポのアウグスティヌスのこと。
- 8) カパ (capa) : 外衣、ポルトガル語を通じて合羽の語源でもある。
- 9) 牡牛 (Vaquillas) の祭り : 2月2日にマドリッド県コルメナル・ヴィエホ (Colmenar Viejo) で開催される牛追祭り、パンプローナの牛追い祭りと同様である。
- 10) リコバヨ (Ricobayo) : カスティーリャ・イ・レオン州。
- 11) カルロ・ギンズブルグ (Carlo Ginzburg 1939生) : イタリアの歴史家、文化人類学や民俗学を援用した事象解釈に特色を発揮している。カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) 教授。
- 11) 三角形理論の解釈 : フロイトの精神分析で知られるエディプス・コンプレックスを指し、子供の成長過程における父・母・子 (男) の三者の関係を言う。またそれを女兒に適用したエレクトラ・コンプレックスをも含めることがある。

解説

これから数回にわたって、動物倫理に関する議論をとりあげてゆきたい。かつて日本の読書界では、西洋は肉食文化、日本は草食文化といった区分けがなされ、それが闘争性と平和主義と短絡的に引き伸ばされたりする傾向があった。今ではさすがにそこまで単純な議論は姿を消したが、さまざまな形でなお余韻を引いているところがある。実際には、魚肉が肉食ではないとは言えず、また東洋文化が平和主義と言うのも、ただちに通用する話ではない。むしろ、昨今、私たちが戸惑わせているのは、西洋において動物の権利の議論が熱を帯びていることである。日本人の西洋理解において永く常識ともなってきたのは、キリスト教の考え方では、動物を人間とはまったく異質な存在とみて、その食物としての活用にはほとんど頓着がないというものだった。しかし近年の議論や動物の扱いをめぐる実態は、もはやそうした通念が成り立たないと思えるほどである。同時に、それが長期のトレンドなのか、またいかなる性質をもつのかは、私たちに分かりにくいだけでなく、西洋文化のなかでもまとまった自己理解があるわけではない。西洋でも、反省意識を失わない人々は、そうした動向に謎めいたものを感じていることがある。

家畜の屠殺をめぐる議論にも注意を向けることになろうが、第一回の今回は、闘牛を取り上げた。闘牛と言えばスペインや南仏、さらにラテンアメリカの諸国のほとんど国技に近いものとして世界的に知られている。その人気は衰えない一方、昨今、批判も高まっている。牡牛を故意に刺激し、苦痛をあたえて狂暴化させ、最後はとどめを刺す行事次第の残酷性が問題視されるのである。そのため反対運動もとみにさかんになっており、裸体の人々が鉞を突き刺された牛を演じる抗議のパフォーマンスが映像ともども世界中にニュー



闘牛士の華麗な技

スとして配信されたりする。バルセロナの州議会は2001年に闘牛の廃止の決議を行った。他方、闘牛の伝統とその洗練された技術を讃美する人々も大勢いる。それゆえかなりホットな話題なのである。またそうしたアリーナ（闘牛場）での闘牛士と牡牛との一騎打ち、すなわち〈コリーダ・デ・トロス〉とは別に、町中を牡牛が駆け回る〈牛追い〉行事も人気が高く、特にスペイン北部のパンプローナのそれは世界中から観光客があつまるといわれる。日本人も例外ではなく、観光ツアーも組まれている。ときには一緒に走った外国人が負傷したとのニュースも流れる。これらの牡牛も、アリーナの牡牛と同じく、殺され、そして食されるようであるが、そのあたりのならわしまではあまり知られていない。



パンプローナのサン・フェルミン祭の牛追い行事

同時に闘牛は文化的にも広がりを見せてきた。たとえばパヴロ・ピカソは闘牛の観戦を好み、闘牛と一体になったものとしての牡牛はさまざまな形で作品世界にあらわれる。闘牛の場面そのものも、晩年の陶藝、殊に絵皿製作における主要なモチーフの一つであった。さらに牡牛とトレロとの攻防を食い入るようにみつめるピカソの表情を見事にカメラでとらえたキャパの作品も光っている。またセルゲイ・エイゼンシュテインの映画『メキシコ万歳』でも闘牛の場面が効果を発揮している。それどころか、オペラ『カルメン』では闘牛士が大きな役割を果たしており、最後はアリーナの大歓声が響き伝わる場外の一画で悲劇を迎える。そういった事例は枚挙にいとまがないであろう。20世紀の50年代や60年代、あるいは70年代あたりまでは闘牛への反対運動などは考えられもしなかったのではあるまいか。と、推移に思いを馳せると、それは独り闘牛にとどまらない、多様な問題を秘めている。少なくともここから何か広がってもおかしくなさそうである。

著者と本稿について

ここに紹介するのは、ドイツのマールブルク大学のヨーロッパ・エスノロジー学科の教授カール・ブラウンの論考である。訳出にあたっては、直訳を少し変えた。そのまま訳せば「サディズムか、儀式的な残酷か？——スペインの闘牛における暴力の役割について」となるだろう。このタイトルについては後にふれるが、先ず書誌データである。

Karl Braun, *Sadismus? Rituell bedingte Grausamkeit? Zur Rolle der Gewalt in spanischen*

Stierkämpfen. In: *Gewalt in der Kultur. Vorträge des 29. Deutschen Volkskundekongresses*. Passau 1993, hrsg. Von Rolf W. Brednich und Walter Hartinger. 2 Bde. Passau 1994. Bd.2, S.451–365.

著者のカール・ブラウンは1952年にバイリン州北部、チェコとの国境に近いヴンジーデル (Wunsiedel) に生まれ、チュービンゲン大学へ進んで、民俗学にあたる〈経験型文化研究〉をヘルマン・パウジンガーに就いて学んだ。また副専攻は比較宗教学であった。卒業後、1985年から1990年までスペインのカセレスに所在するエストレマドゥーラ大学へ赴任してドイツ語・ドイツ文化を担当した。



カール・ブラウン (近影)

その後1992年にパウジンガーの下で18世紀の社会と性生活の歪みの相関に関する研究で学位を得、次いで1992年から97年までチェコのプラハ大学で教えた。その間マルブルク大学でマルティーン・シャルフェに就き、1997年に大部な闘牛論を提出して教授資格を得た。1998年からフランクフルト・アム・マイン、マルブルク、ゲッティンゲンの諸大学で教授職に就き、2002年にマルブルク大学の正教授となった。2005年から同大学の社会科学部の副学部長、次いで学部長を務めた。ドイツ民俗学会の活動では2011年以来、ドイツ民俗学会の会長である。

ブラウンはドイツ民俗学界では特にスペイン語に堪能でスペイン文化に厚い知見をもつ研究者として知られ、現在に至るまでムルシア、グラナダ、サラマンカの諸大学の客員教授を務めて、ヨーロッパ・エスノロジーの分野で主に大学院生の指導にあたっている。

本稿は、1993年に第27回ドイツ民俗学大会 (隔年) が「文化のなかの暴力」をテーマとしてパッサウで開催されたときの発表で、翌年、大会記録に収録された。またその前段階として、マルブルク大学民俗学科が編集する『ヘッセン民衆・文化研究誌』の1991年の号が「人と動物」の特集号で、そこに「〈命のつづきゆかんため〉——スペインの闘牛の歴史的・文化的背景」 („*Damit das Leben weitergehen kann*“ . *Zum historischen und kulturellen Hintergrund des spanischen Stierkampfes*. 本論に付された参考文献リストを参照) を発表していたことが土台になったようである。

論の方向は、大ざっぱに分類すれば、闘牛の擁護論である。これは上記のドイツ民俗学大会が「文化のなかの暴力」を掲げ、そのテーマ設定から予想されるように暴力への批判や否定が自明のようになるなかではやや挑発的な性格をもっていた。今となってはそうした状況に留意する必要はないであろうが、若者の暴力を特にスキンヘッドなどに焦点を当てて論じたローナルト・ルッツの発表などとともに異色ではあったようである。

それはともあれ、次に論の構成についてである。基本は、闘牛がスペインの伝統に根ざ

すこと、また伝統のなかにはたらいっている心理が今も息づいていることが挙げられる。その論は簡単に言うと次のような構成である。一般に闘牛は非常に古い伝統を持つとされるが、スペインのそれは決してそうではない。古い伝統、エーゲ海のクレタ島に栄えたミノア文化といった古代ギリシアよりもさらに古い先史文明までを挙げて偉大かつ長大な伝統が言いたてられるが、壮麗な闘牛場（アリーナ）でくりひろげられる今日の仕様は18世紀から19世紀の啓蒙主義時代に整いはじめたものである。しかしまたスペイン各地、それどころかヨーロッパ各地には民俗行事と言えるような牛追いの祭りがおこなわれてきた。イギリスのスタンフォードにもそれがあったが、やがて理知を重んじる風潮のなかで官庁によって廃絶に追いやられた。スペインでは、かつてのイギリスと近似した貶視や抑圧によって衰微しつつもなお各地にそれが残っている。しかもそこでの行事次第はすこぶる儀式的である。それは演出としての儀式ではなく、人間と社会の生存の根源につながるような儀式性である。牛は追われ、さらに自ら走り、最後は殺されて、食され、それを通じて生命の流れはつづいてゆく。そこには再生への願望がひそんでいる。一口に言えば、豊饒信奉である。その表示と結節となるしぐさが、都会化された闘牛場とその観衆にも再現する。その脈絡こそ闘牛を成りたたせている根源であるとされる。

翻訳を供しているので、この程度の端折りで十分だろうが、興味深い論である。しかしこれに関心を持ち、紹介しようとも思ったのは、複雑な感慨をもったからである。それは否定とか肯定とかではない。ここから幾つかのことがらが見えてくるのである。

一つは伝統文化に対する、今日、中心になって活躍する文化人類学者や民俗学者がしばしば見せる思考の型である。それはここでのような生き物の命にかかわる行事にかざられることではない。論者のブラウンは特にイタリアのカルロ・ギンズブルクの読み解きに議論の支柱を見出している。今日人気の高い歴史家、というより文化人類学や民俗学に接する分野での斬新な解説に特色を見せる文明論者である。とりわけ過去・現在共に民俗文化の行事次第に、生存と社会の根源的なものを読み取るのがその特徴であり、引かれる事例の意外性と論の運び方の巧みなことで説得力をみせている。民俗文化への同じようなアプローチは、ニコレッタ・ディアジオやマルチーナ・セガレーヌにも見ることができる。たとえばディアジオは、シチリア島のペファナ祭における砂糖菓子の、壊れ食べられ消えてゆく移りゆきに再生と生命の流れを読みとったことがあった。そこに生存の基本条件の標本と根源的な願望である豊饒を見るのである。これは、世代的にもほぼ共通する文化人類学と民俗学の代表者たちの近似した姿勢である。しかし率直に言えば、筆者はそうした論にはあまり賛同できない。それはネオロマンティシズムの形を変えた再来と思えるからである。フレイザーの理論の破産は明らかであり、それが学界や読書界にあたえた被害の大きさも紛れもないが、今、それと類似のものが現代に合わせた衣装を着けてあらわれている危険を感じるのである。



メキシコの首都メキシコ市 (Mexico City) で
6日、動物愛護団体「アニマ・ナチュラリス
(Anima Natural)」



コロンビアのボゴダでの反闘牛のパフォーマンス

なお付言すれば、何らかの社会的・文化的事象を擁護しようとするとき、それが伝統に根差すというのは、しごくまっとうな議論とみえる。民俗文化はその脈絡で引き合いにだされ、正当化に活用されることが多い。しかし、伝統に根ざしているから、あるいは民俗行事と背景でつながっているから、というのは現実のものごとを正統化する上で本当の理由にはなり得ない、とも筆者 (河野) は考えている。現実はどう対処するかは、現実のなかに理由がなくてはならない。

しかし、ブラウンの議論に関心をもった理由はもう一つある。今日の西洋世界における動物の権利や動物愛護の議論が、説得性にとぼしいのである。当事者たちが真剣であることは紛れもない。しかしきちんとした思想や理論を欠いていると思われることが多いのである。現実には、大勢の人々が夢中になり、ファナティックにすらなっている。それは西洋文化がしばしば見せた型と言えるほどある。〈その時代その時代の理論にのめりこみ極端化する傾向〉とは、レーオポルト・シュミットがドイツ文化に対しておこなった批判であった。

そうしたなかで、動物への虐待ともみえる性格を一部ではもつイベントを擁護するとすれば何があるだろうか、伝統を説き民俗行事とのつながりを引き合いに出すのはいわば定石であり、一度は耳を傾けてみる必要があるだろう、そしてどの程度それが説得的なのか、をも確かめたい、おそらくそれは十分ではないだろうが、そこから見えてくるものがある、そうした感想をもったのである。それゆえ、このシリーズはしばらく続くことになるだろう。